

---

# ロード オブ ギャラクシア

蒼井水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロード オブ ギャラクシア

### 【Nコード】

N3338Z

### 【作者名】

蒼井水晶

### 【あらすじ】

永遠とも言える果てしなき世界を旅して、降り注ぐ幾億ものきらめき。

その1つ1つに、それぞれの歴史が綴られている事だろう……。

これは、そんなきらめきの1つに記された、英雄達の物語。

少年は旅立つ。

その旅路の中で、仲間を、友を見つけていく。

しかし、その仲間達には美少女が多かった!?

架空の大陸を舞台に繰り広げられる、ドタバタハチャメチャバトル  
ラブコメ（ハートフルボツコ）ストーリーが今始まる――。

## プロローグ（前書き）

蒼井水晶初のオリジナル作品です。

拙い文章ですが、皆様が楽しんで頂けることを祈っています。

## プロローグ

ここは、我々が住んでいる世界とは少し違う世界。  
その世界の中央には、巨大な大陸があった。

『ギヤラクシア大陸』

それが巨大な大陸の名前である。

その大陸はその巨大さゆえ、果てを知らない。  
いや、正確には果てが分からない、と言うべきか。  
我々の世界より遙かに進んだ技術を持つてしても。

世界の果てには失われた楽園、伝説にうたわれた楽園、『エデン』  
があると言われている。

その見果てぬ夢を目指して、多くの冒険家が旅立った。しかし、誰  
1人として帰っては来なかった。

この大陸には、様々な種族が住んでいる。

人間族、ドワーフ族、エルフ族……などだ。

今、この世界で繁栄を誇っているのは人間族。

様々な種族を取り込み、肥大化して来た。

その人間達の主な大国は3つ。

<sup>エンバイア</sup>帝国、ロンバルディア大陸同盟、ドラクシル王国。

この対立する3つの国は、国が成立してから、幾度となく争って来  
た。

最大の国力を持つ<sup>エンバイア</sup>帝国。

最大の軍事力を持つロンバルディア大陸同盟。

最強の兵士と武器を持つドラクシル王国。

その特徴と、地理的条件も合わさって、この争い合う3つの国は決  
着がついた事が無い。

現在進行形で戦争中のロンバルディアとドラクシル。

100年前の『ホルスの大逆』以来、不気味な沈黙を続ける帝国……。

増え続けるビースト達……。

そして今なお蠢く闇の勢力……。

この混沌とした時代に、光を降ろす者は現れるのか。

それとも、『エデンの伝説』が見つかるのか。

それとも、『狼の日』が訪れるのか。

神話を繰り返す様な予兆。

そして……、世界は揺れ始める。

そこに、1人の青年が旅立つ。

光という信念を心に秘め、新しい旅に出る。

仲間と出会い、友と戦う。

何を信じ、誰と戦うのか、

その運命は、自分で決めなければならない……。

## プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回にやっと主人公が登場します。  
それでは。

## 第一話 ― 青年 ― (前書き)

今回はバトルになります。  
ヒロイン1人目の登場です。

## 第一話 ― 青年 ―

大陸の中央、やや下。

そこに帝国の首都、エンパイア<sup>エンパイア</sup>シティがある。

そこには、人間だけでなく、エルフモドワーフも、はたまた、獣人族といった種族まで、種々雑多な民族が暮らしている。

ただ、最近は傭兵崩れの連中や、盗賊などが流入してきているため、治安があまりよろしくない。

そのため、帝国警察はスラム街への見張りを強化しているとかいないとか。

また、テロリストへの対応にも四苦八苦させられている。

まあ、本格的にエンパイア<sup>エンパイア</sup>シティに攻め込むには、地方都市を突破し、外部城壁を突破し、無数の砲台や機関銃がついた城塞を打ち破り、内部城壁を破壊し、それでやっとこさ郊外へと辿り着く。

しかし、街1つが巨大な砦となっているため、突破するのは容易ではない。

エンパイアシティの中央、北西部。

治安が他の地域と比べると格段に良い。

帝国の観光地の1つである、エヴァン二城があるのもここだ。

エヴァン二城とは、帝国創世記の偉大な將軍、バルドー・エヴァン二伯爵の名を取った2つの城のことだ。

しかし、100年前の『ホルスの大逆』以降、ビーストの巣窟となっっているそうだ。

また、北西部には、若者が多い。

ここには、帝国軍術学校があるからだ。

帝国軍術学校、その大正門に青年は居た。

短い黒髪に狼を思わせる鋭い瞳。

細身だが筋肉質の体つき。

身長は170センチ前後だろう。

その瞳ゆえ、雰囲気に近い物がたい物がある、というわけでもない。全体的に穏やかな雰囲気に含まれた青年だ。

腰にはロングソードと拳銃が揺れている。

彼は、大正門前で何かを思案していた様子だったが、思い切ったように顔を上げると、セントラルストリートをゆつくりと西に向かって歩き始めた。

30分ほどたっただろうか、同級生や先輩と挨拶を交わしながら歩いていった彼が足を止めた。

そこには、アイテムショップがあった。

ただし、強盗団に占拠されていたが。

彼は目を細め、強盗団の全容を仰ぎ見る。

人数は5人ほど。

傭兵崩れのように、ボウガンやライフル、騎兵用のスピアをもって  
いるようだ。

中央に居たのがひげ面で大柄な男。

周りの連中より一回り大きく、腰に下げていたのは、ロングソード  
ではなかった。

グレートソード。それがその剣の名前。

両手で扱う大型の剣。

ロングソードの場合は、片手でも両手でも持てるように柄が工夫されて  
いるが、グレートソードは違う。その大きさのため、両手でしか振る  
えないのだ。

しかも、力の弱い人でも斬る事は出来るが、振り回すことはできない。  
い。

それを振り回す事ができるのは力の強い者だけだ。  
ちなみに、遺伝的に力が強く、寿命も非常に永い竜人族はこの剣を

好むらしい。

彼は、ショップを包囲している警察の一群へ近づき、声をかけた。

「ここを占拠しているのは？」

「なんだなんだ野次馬か！邪魔だ邪魔だ、どけ！」

「大丈夫。俺は軍術学校の生徒です」

「ん……オホン！これは失礼した。何用かな？」

「ここを占拠しているグループは？とお聞きしました」

青年は響く様なテノール声で聞いた。

それに対し、警察官は、一度咳払いすると、報告書を読み上げた。

「アイテムショップを占拠しているのは、元ロンバルディア軍所属の傭兵達だ。」

今の二国間戦争はロンバルディアが優勢だ。大方、もういらなくなつて首を切られた、つてことだろうな」

「はあ……、はた迷惑な話だ。で、なんで突入してないんです？」

「それが、第一班と第二班は突入したのだが、いいようにあしらわれて沈黙させられた。殺されてさえない。あいつらはどうやらただの飲んだくれではないようだ。戦場をわたつて来た猛者達だろう」

「なるほど……」

「どうするんだい？第三班はたつた今、全員沈黙した。我々は今増援を呼んでいる。機動隊が到着するまであと30分だ」

「俺が行つてみます」

「やめたまえ、君の様な実戦経験も無い若者に勝てる相手ではない」

「案ずるより産むが易しつていうでしょう？問題ありません」

「む……」

遙か東の島の諺を引用しながら言つた余裕綽々の笑みを見て、何かを感じ取ったのか、警察官は苦笑を見せ、『行つてこい』と手で示した。

「待ちたまえ！君の名前を聞いていなかった。教えてくれ」

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

その言葉を最後に青年——スタンリー・アークエッジはショップのドアを蹴破った。

「うつ……、酒臭え」

スタンリーは思わず鼻を押さえる。

仕方の無い事だ。そこには、『海賊の酒』と呼ばれる度数80度のドギツイ酒の瓶が転がっていたのだから。

今、傭兵崩れの盗賊団は絶賛酒盛り中だ。

不満そうな見張りの2人を除いて。

スタンリーは息を止め、足下にあつた酒の空き瓶を拾うと、ふつ、と息を1つ吐いて空き瓶を左の男に投げつけた。

「ぐあつつ?!」

見事命中。

「どオした!!」

空き瓶の割れる音を聞いて、大柄な男を除く3人が駆け寄る。

その駆け寄った隙に、スタンリーは乱雑に倒された商品の影へ身を隠す。

「また突入してきやがったのか、三度目はねえ!皆殺したア!」

と見張り——空き瓶を投げつけられてない方が大声を出すと同時に、スタンリーは腰の拳銃を抜いた。

『ミリタリー&ポリス：マークA』

それが拳銃の名前。

インベリアルガード

帝国防衛軍や、帝国警察に流通している実弾銃。軍術学校で支給される銃だ。

かなり使い込んであるのだろう、銃全体が黒光りしていた。

安全装置を外し、残弾数を確認。

——昨日マガジンを変えたばかり。問題は皆無。

一瞬の思考の後、発砲した。

放たれた弾丸は、大声を出した男の右の腕へと命中。

続けて放たれた弾丸は、右足、左足両方の太ももへ命中。

たまらず、膝をついた所で、走って来た勢いを乗せた右ストレートがその顔面へ叩き込まれた。

「目標1、沈黙」

誰に伝えるとなく呟いて、次の男へと向かうスタンリー。

その顔面にスピアが突き出された。が、それを半身になってかわし、左足で踏み込みつつ、銃を握った左拳を眉間に突き当てた。

しかし、弾丸は発射されない。

ただ、男は脳震盪を起こし、気絶した。

「強い……！」

大柄なリーダー格の男が小声で叫び、凶暴な笑みを浮かべたのにスタンリーは気づかなかった。

ボウガンを持った男が二段回し蹴りを打ち込んでくる——スタンリーは地面と水平になるほど身体を反らせ、それを避けると、その体勢のまま、ジャケットの内側のホルスターからもう一丁銃を取り出し、男の胸に突きつけた。

『GANNER SINGEL HAND .45』

フォーティファイブ

ガンナー・シングル・ハンド・45。それがその拳銃の名前。

45口径の拳銃。

赤子の時のスタンリーが入れられていた箱に入っていた拳銃であり、弾丸を自動で生成するという特殊な機構を持つ。

これを扱えるのはスタンリーしかない。

この機構は現在の技術では再現不可能であるらしい。

「楽になれ」

その台詞と共に、左手に握られたフォーティファイブが吼えた。

その頃……。

外を包囲する警察官達はこの地区の警察署長の訪問をうけていた。

「状況は？」

警察署長が低い声音で問う。

「現在、軍術学校の青年が1人で戦闘中です。強盗団は3人が沈黙、1人が死亡の恐れあり。栄光ある我々帝国警察が1人の青年に鎮圧を任せるとは……、弱くなったものです」

さきほどスタンリーの相手をした老警官が苦々しげな笑みを浮かべながら答えた。

彼は50歳を超えた大ベテランで、この現場の指揮を執っていた。

「ふむ……。そうか……。君がそう言うのならさうなのだろうな」  
警察署長も同じような苦い表情を浮かべた。

そして、後ろに隊員達へ顔を向けた。

「何をしている?!?!」

突然警察署長——フランク・ドーウェーは激昂した。

後ろで茫然自失としていた、警察隊員に向かつて。

その憤怒の表情を向けて怒った。

「何をしていると言っている！誇りある我々帝国警察が、たかが5人の強盗団に撃破されたあげく、いくら軍術学校へ通っているとはいえ、まだ希望に満ちあふれた若い一市民を援護もせずたった1人で突入させるとは何事だ！貴様らそんな事ぐらい上官の命令無くてもやらんか！！愚か者どもが！己の仕事と正義を果たせッ！」

一同はぼかん、と間抜け面をさらしていたが——真っ先に正気を取り戻したのは荒事に慣れている機動隊の面々だった。

表情が瞬く間に引き締まり、それまで動けずにいた自分達を恥じるように舌打ちをして、次々と突入を敢行した。

機動隊員が突入を始めたその時、スタンリーと最後に残った男は睨み合っていた。

「ふはは……」

男が凶暴に笑う。

対して、スタンリーは無言で立っていた。

「強いな、少年。これでやっと俺は終われる」

男はどこか寂しげな笑みを浮かべていた。

「……………」

「おいおい、なにか喋ってくれ」

「1つだけ聞く。ミリはどこだ」

スタンリーは足下でうめく盗賊を冷然と見下ろしながら言った。

「ミリ……？ああ、あのガキか。奥だ。何も危害は加えていない。

これは約束する」

スタンリーは名誉や金が欲しい訳ではなく、ここを経営している家族と顔見知りであっただけである。

彼はここを経営している夫妻の1人娘、彼に懐いている少女が気にかかり、1人で飛び込んで来たのだ。

「店主と奥さんは……？」

「悪いが……………」

男はそう言つて隅を顎で示した。

「……………！」

スタンリーは声も無く驚く。

ギリリ。歯茎がきしむほどの力で歯を食いしはる。

胸の奥底から沸き上がる感情は何だ。怒りだ。

ふがない自分への怒り、後悔、憤怒。

——俺はこんな俺を許してはいけない。

彼は怒りに身を任せた。

怒りは興奮へ。

恐怖を握りつぶす活力へ。

腰の長剣を抜き放ち、怒りのままにあり余る力で剣の柄を痛いほど握りしめる。

「おおおおおおおっつー！！」

その怒りは抑えきれず、声に表された。  
咆哮。

それと共にスタンリーは爆発的に地面を蹴り、駆ける勢いのまま相手の懐に突進した。

「ハアツツ!!」

その突進をニヤリ、と笑いながら見、男は短い気合いと共に青年の頭上に大剣を振り下ろした。

それを転がってかわす青年。

転がって立ち上がったところに二段撃。大振りの薙ぎ払いと、突きのコンビネーション。

薙ぎ払いを身体を沈めてかわした青年は、突きを横に弾いて力のベクトルを横に受け流した。

——このガキ、腕が立つ。

一旦、飛び退いて体勢を立て直し、その青光りする剣をこちらへ向けて構えている青年を男は笑みをたたえて見返した。

普通、中途半端に腕が立つと俺の大剣を受け止めようとするが、このガキは受け流した。まともに受けたら剣がへし折れることに気づいたか。

まったく、初めてだぜ。俺の剣をかわすどころか、その特性まで見抜きやがった。

——訓練、じゃねえな。こいつあ、『実戦経験』がある。

そこまで思考すると男は青年に声をかけた。

「おいガキ！名前は何だ？」

「あんたに教える必要は、ない！」

勇ましいねえ。

まるでそう言うかのように歪められた口は、男が戦場を駆け巡って来た猛者であることを如実に示していた。

スタンリーは飛び上がりながら斬り上げる。

その華麗な斬撃を、男は口笛を吹きながら避ける。

スタンリーは返す手で、跳躍した状態から急速落下し、剣を男の頭

上に叩き付けた。

ガキンツ、と金属音が響き渡る。

「ハッ、いい動きしてるじゃねえか！」

口元に相変わらず笑みを浮かべながら男は挑発した。

「フン、お楽しみはこれからだ」

とスタンリーも笑いながら挑発を返した。

「行くぜ！」

スタンリーが繰り出したのは多彩な斬撃の連続攻撃。グレートソードが取り回しの良くない武器と一瞬で見抜き、強力な斬撃よりもこちらの方が効果がある、と結論づけた。

長剣の特性を十二分にいかしたコンボ攻撃は次第に男を追いつめていく。

しかし、手首を返す一瞬の隙を突かれ、剣を遠くへと飛ばされてしまった。

「ガキが……。終わりだ」

男は剣を頭上に高々と掲げ、スタンリーを兜割りに一刀両断にしようとしている。

「スタンリーお兄ちゃん！！」

男は驚きの表情をして、奥の部屋に視線を転じる。

「ミリッ！来るな！！！！」

走り寄ろうとした少女に向かって叫ぶスタンリー。

「チイツ」

男は舌打ちをして、剣を振り下ろした——が、弾かれた。一体何が起こった？

咄然とする男を目の前には、硝煙が煙っている銃口。

何が起きたか。

それは、スタンリーが一瞬で腰のホルスターから『ミリタリー＆ポリス：マークA』を抜き、剣の軌道に合わせて、撃った。

そのことにより、振り下ろされる剣の力のベクトルは逆へと転換され、弾かれたと言う訳だ。

「ゲームセットだ」

男が聞いたその言葉は、いやにゆっくりと空間に響いた。  
ドドドドン！

バックステップと同時にスタンリーは男の四肢へちようど四発の弾丸を撃ち込んだ。

「ぐお……！」

地響きを立てて男が倒れると同時に、少女が飛びついて来た。

「ミリ……！大丈夫だったか！？」

ミリ・ヘクター。

紫の髪を腰まで伸ばした155？ぐらいの小柄な少女。スタンリーよりも2つ年下の15歳。

懐いている、と言うよりは、好意を抱いていると言った方が正しいのだが、スタンリーは自分に対しての好意に全くもって気づかない超弩級の鈍感だ。

彼女からすれば『好き』なので、スキンシップをするのだが、スタンリーからすれば『妙に懐かれている』からスキンシップをされていると思っている。

この認識の相違は直すのに多大な労力が必要だ。

胸下の辺りに飛びついて来た少女の頭を撫でながら彼は言った。

「うん……、ミリは大丈夫、でも、グスッ、お母さんとお父さんが……うえええん……！」

15歳の子供には辛いだろう。

両親が2人とも殺されたのだから。

その苦しみは言語を絶するものがある。

——俺には両親がいない。だから、この苦しみが分からない。だけど、デイビットが殺されたら、俺も泣くだろう。

彼は心の中でそう思っていた。

スタンリーは捨て子である。その彼を男手1つで17歳まで育て上げたのは教会地区のデイビット神父だった。

教会前に捨てられていた彼を拾い、育てた。

——「デイビットにミリのことを頼んでみよう。なんとかしてくれるかもしれない。」

そう考え、後は警察に任せて退散しよう、そう思ってミリの手を引き、階段へ向かったところで、男が跳ね起きた。

最初に瓶を投げつけられ、気絶していた男だ。男は腰の剣を抜き放ってこちらに走ってくる。

「ミリ、伏せてろ」

「うん！」

少女を地面に伏せさせると同時に、懐のフォーティファイブを抜き、身を屈めて敵の横薙ぎをかわすと、その顎へ向けて銃のバレルを突き入れる。

それと同時に、フォーティファイブの銃口が火を噴いた。  
バン！

一発の銃声と薬莢の転がる音。

男は顎から頭にかけて撃ち抜かれ、即死した。

その動きを見ていた機動隊員が驚愕の表情を浮かべて呟いた。

「GAN II FIGHT……」

『GAN II FIGHT』とは、ここ5年ほどで急速に広まった近接戦闘術。

銃の射撃と軍隊格闘を高度に組み合わせた戦闘術。

ゼロ距離での射撃戦や、一対多数の戦いを制するために開発されたと言われている。

機動隊員にとって、今、彼が見せた動きは驚きだった。

機動隊員は、軍術学校の生徒の『GAN II FIGHT』がこれほどの技術を持っているとは思っていなかったのだ。

しかし、彼の認識は間違っていた。

外では、スタンリーについてのデータが送られて来ていたが、その一点を見て警察署長たちはあぐりと口を開けた。

『G A N II F I G H T』の創始者と戦い、勝利した——とそこには書いてあった。

「異常、と呼べるほどの闘争センス」

「あの青年は完璧だ。今の帝国軍人ならば万に一つも勝ち目はない」「彼を鍛えた。彼ならば私を超えることが出来るだろう」

そう、創始者の言葉が述べられていた。

「む……、奴らを取り押さえる！」

フランク・ドーウエーはあぐりと口を開けていた状態から意識を取り戻すように首を振ると、高らかに命令を下した。

入口から青年と少女が出て来た。

それを見て警官達は万歳を叫び出す。

フランクも口に緩やかな弧を描く。

「良くやってくれた。スタンリー君」

フランクは2人に穏やかに声をかけた。

「いえ、それより、ミリを教会へ連れて行ってよろしいでしょうか？」

そのフランクとは対照的にスタンリーの拳は白くなるまでに握りしめられていた。

「それは構わないが……どうかしたのか？」

「いえ、少々自分が許せないだけです」

「……。今、報告を受けたが、彼女の——」

とフランクは青年の横の小柄な少女を見下ろしながら深刻な表情で言った。

「御両親が亡くなったとか。そのことについてだろう？」

「なぜ……、分かるのです」

「君の表情を見れば分かる。気負わないでくれ。元はといえば我々

の責任だ。……すまなかった」

フランクはミリに向かって深く頭を下げた。

「俺らはもう行きます。署長もお気をつけて」

「うむ、ありがとう」

夕日に照らされて教会へと手をつないで歩く2人をまるで兄妹だ、  
と思いつつ、フランクは彼らが教会に消えるまでその背中を見守っ  
ていた。

## 第一話 ― 青年 ― (後書き)

いかがだったでしょうか？

次回は育ての親と、他のヒロインより一歩進んだ位置にいるヒロインを出します。  
それでは。

## 第二話 ―教会―（前書き）

教会を舞台にラブコメ（なんだそりゃ）が始まります。

## 第二話 ― 教会 ―

いつのまにか夕方。

兄妹のように寄り添う2人は教会地区へと、燃えるような夕日のなか、歩いていった。

「大丈夫か？」

スタンリーは心配と安堵がないまぜになった表情で、ミリへと声をかける。

「ミリはもう大丈夫だよ。お父さんとお母さんがいなくても、お兄ちゃん達がいるから」

彼女は太陽のような笑顔を浮かべた。

――なんて強い少女だろうか。

スタンリーはそう思った。

――この子の笑顔を曇らせるわけにはいかない。

彼はそう改めて決意した。

「ねえ、お兄ちゃん？ミリはこれからどうすればいいのかな？」

純粹そのものの瞳で聞いてくるミリを見て、スタンリーは思わず目が熱くなった。

なぜか知らないが、とても切なくなった。

凄絶な体験をしてもなお、純粹さを失わなかったその瞳。

まるでこの少女がどこか手の届かないところに行ってしまうのではないか、そのような不安に駆られるほど儚く見えたその瞳。

その力を入れたら、ポキリと折れてしまいそうな線の細い体。

全てが淡い幻想のような、そんな気分させる。

思わずスタンリーは膝をかがめ、ミリを抱きしめていた。

いま、抱きしめなければ彼女は霧の中に消えてしまう――そう、心のどこかで叫んだ自分がいた。

「お兄ちゃん……？」

いぶかしげに見上げて来たミリにその泣きそうな顔を見られなくな

くて、彼はミリの肩に顔をうずめて、震える声で繰り返した。

「ごめん、ミリ、ごめんな……守れなくて、ごめんな……」

ミリは抱きしめられたまま、スタンリーの背中におずおずと手を回した。

「なんでお兄ちゃんが謝るの？お兄ちゃんはミリを助けてくれたんだよ？」

その彼女の優しさが痛かった。その彼女のぬくもりが切なかった。

「ごめん……今だけでいいから……このままにさせてくれ……」

彼はミリを抱きしめたまま静かな嗚咽を漏らした。

それに彼女が気づいていたかどうかは分からない。

しばらくたって……。

「ごめん、情けないところ見せちゃったね。行こうか」

彼の口調は明らかにいつもより優しい。

スタンリーと同年代の少女達と喋るときと比べると、柔らかい。

ミリ専用、というか、対年下用と言うか、包み込むような口調であった。

スタンリーはくしゃりとした、困ったような笑みを浮かべてミリを促した。

「うん！」

ミリは元気よく返事をして、また2人で歩き出す。

50mくらい歩いたところで、スタンリーの体がぐらりと揺れた。

「む……」

がくつ、と膝を地面につき、荒い息を漏らす。

「お兄ちゃん！？大丈夫！？」

「大丈夫。少し力を使いすぎただけ」

彼はそう言つて、ジャケットの前ポケットから『ポーシヨン』を取り出した。

『ポーシヨン』

この世界で流通している体力回復薬の名称。

自分の最大体力の50%を回復することが出来る。

それを一気に飲み干し、「ふう…」と彼は息を吐いた。

「ゴミ箱はどこかなつと」

彼は通りを見回し、歩道に設置されていたゴミ箱にポーションのパックを捨て、歩き出した。

2人は教会に着いた。

スタンリーはドアを叩いて呼びかけた。

「デイビット！帰ったよ！」

1分ほどして、神父服を着て、白いひげを顎に蓄えた老人が出て来た。この老人こそ、スタンリーの育ての親、デイビット神父である。その落ち着いた風貌と言動で、地区の人々から慕われている。

若い頃は凄腕の賞金稼ぎだったらしい。  
バウンティハンター

「おお、スタンリー。怪我は無いか？」

「どこも。それよりさ……」

「何も言つな。おまえの言いたいことはわかっている」

デイビット神父はその表情を見て、スタンリーの言いたいことがすぐ分かったようだ。

さすが育ての親である。

「ミリ、良く生きててくれた」

そう言つてデイビット神父はミリを抱きしめた。

行動が似た者親子である。

「ミリ、良かったのだが、この教会でスタンリーと共に暮らさないか？」

スタンリーが聞きたかったのはまさにこのことだ。

ミリを教会に住まわせてもいいか？

スタンリーはそれを聞きたかったのだ。

「ミリは大賛成！」

ミリは元気に。

「俺は言うまでもねえよ」

スタンリーは、少し恥ずかしいのだろうか、頬を掻きながらそう言った。

「よし、決まりだな」

デイビット神父は緩やかな微笑みの中で2人の決定を見守った。これから祈りの時間だ。

スタンリーは祈りを終え、新しくミリの部屋になる場所へと向かった。

コンコンツ、と2つノックをしてから入る。

もし、ミリが着替えていたら大変なことになるからだ。

スタンリーには経験がある。

幼なじみと言うべきなのだろうか、彼女は孤児だった自分に差別の視線を向けること無く接してくれた。

彼女のしなやかな裸体を一度見てしまったことがある。

もちろん、悲鳴を上げられた。

「どうぞー」

——ミリじゃない？でもどつかで聞いたことのある声。

そう思考しつつ、ドアを開けた。

「スー君？」

「ブフツ、ごほつ、ごほつ、ごほつ」

スタンリーは——小さく吹き出してから、咽せた。

——俺をスー君と呼ぶヤツは1人しかいない。

「やっぱり、スタンリーだあ」

——フェルム・ヴェンジェンス。俺がつけたアイツの愛称はフィー。そこにいたのは、栗色の髪を肩まで伸ばし、同色の大きな瞳をくりくりとさせている美少女。17歳。スタンリーと同年。

「フィー、どうしてここにいる」

吹き出したその表情をなんとか引き締めながらフェルムに問うスタンリー。

「もー、デイビットさんから聞いてないの！？掃除を手伝って、だよ！」

——あんの、馬鹿親父イイーーーー！！！！

スタンリーは心の中で育ての親を盛大に罵った。

「わりい、聞いてないみたいだ」

「うん、わかったよ」

彼女が、スタンリーに差別の視線を向けずに接してきた初めての人だった。（育ての親のデイビット神父は除く）

そのせいか、それとも彼女の優しい性格のせいか、彼はフェルムに好意ではない、がしかし、明らかに特別な思いを抱いている。

『アイツは俺が守らなきゃいけないヤツなんだ』

彼の脳裏に幼い日の誓いが甦った。

——その誓いは今でも変わらないよ。フェルムの親父さん。去年亡くなった彼女の父親に心のなかでそう呼びかけた。

『アイツは俺が笑顔にしなければいけない女の子なんだ！』

デイビット神父にそう言ったことも甦ってきた。

——懐かしいな。

彼は急に思い出した幼き日の記憶に対し、そう思った。いつの間にか、彼の顔には微笑が漂っていた。

「もー、スタンリー、聞いてる！？」

「聞いているさ」

2人は掃除をしながらたわいもない話で盛り上がった。

——俺にはやはり、フェルムが必要だ。

スタンリーはそう、誓いを新たにした。

その頃……。

デイビット神父はというと。

ミリの部屋のドアに、つまりは今2人がいる部屋のドアに耳をぴっ

たりと付けていた。

何やってんだあんた？

部屋の中からは彼の息子と、娘のように思っている少女。

2人の楽しそうな笑い声がドア一枚を介して聞こえてくる。

彼らの笑い声を聞いて、デヴィット神父も穏やかに微笑んだ。が、次に呟いた言葉はおよそ聖職者らしくないものだった。

「ここまで、お膳立てしてもくっ付かないか、むう、どうするべきか……」

おい、あんた一体ナニさせるつもりだ。

「しかし、見ててむずがゆくなるな、あの2人は」  
スタンリーと、フェルム。

互いが互いをととても大切に思いすぎているせいか、2人の関係は家族のような、友人のような、そして、恋人のような曖昧なもの。

そのため、このドアの向こうに広がっている空間は桃色と言うより、オレンジ色の空間だった。

「むう、いつそ既成事実を作らせてしまうか……？」

おい、あんた本当に聖職者か？

「やっぱり、（諸事情によりこの文章は削除されました）なことをさせるしかないか」

と、難しい顔でぶつぶつ変なことを口走るデヴィット神父。

ここが教会じゃなかったらあんたただの変質以下略。

「じゃあ、そろそろお店の時間だからわたしは行く、だよ？ 鍵は閉めておいてねー」

花が咲いたような笑顔で頼み込まれたスタンリー。

「たくっ……」

スタンリーは呆れたような言葉を吐いたが、彼の顔は優しい笑みに彩られていた。

フェルムの満面の笑みでの『お願い』を彼は断れる訳が無い。

フェルムはメアリーと言うウェイトレスと共に喫茶店を営んでいる。

父親の形見の喫茶店を譲り受けた形で出している。

ゆえに、経営者兼厨房担当兼給仕という、なにげに凄い女の子。スタンリーはその喫茶店『キャンディ』でいつも朝食を食べる。

昼はフェルム特製の愛情弁当（↑ってオイ）を食べている。

夜は彼女が教会に来て手料理をふるまったり、デイビット神父がつくったり、スタンリー本人が作ったり、たまにだが、ミリが作りに来たり。

ミリはああ見えて料理が上手く、プロ級なのだ。

ミリに『キャンディ』でお手伝いしてみたら、と進めようと思っているスタンリーだった。

「どうしようか……？」

誰に聞くとも無く呟いた。

「寝るか」

「ってオイ。そこミリのベットじゃないのか？」

「……」

寝てやがる。

では皆さん、ごきげんよう（↑おまえ誰だよ）

## 第二話 ―教会―（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は喫茶店『キャンディ』の話が主になります。  
それでは。

### 第三話 — 喫茶店 — (前書き)

今回はスタンリーが少々不憫な目にあっています。

### 第三話 ― 喫茶店 ―

夜になった。

スタンリーはミリと共に、教会の向かい側、喫茶店『キャンディ』へ向かう。

『キャンディ』の中はいつも、柔らかな雰囲気漂っているのだが、今日は違った。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

見るからに軽そうな男2人が、ウェイトレスの服装――黒いロングスカートに白いブラウス、白いエプロンに同色のヘッドドレス、という格好をしたフェルムの腕を掴み、ナンパしていた。かなり強い力で掴んでいるのか、彼女の顔が痛みに歪んでいる。

「え、いや、あの仕事があるんで……ちよつと困るかなー？」

「じゃあ、仕事が終わった後でいいから」

「え……いや、っその」

「じゃ、待ってるよ」

――アイツが痛がつてんじゃねえか。ブッコロス……！

ミリは壮絶にイヤな予感がして、彼を振り仰いだが、時すでに遅し。「ミリ、ここで待ってろ」

そこにいたのは、ブチ切れすぎてなにかのメーターが振り切れたスタンリー。

怒れば怒るほど熱くなるはずの彼が笑う、これほど怖いことがあるのだろうか。

口元は綺麗な三日月を描いているのに、目は全く笑っていない。ここに良く来て、フェルムとスタンリーの関係――家族のような、友人のような、そして恋人のような。

その曖昧な関係を知っている常連客は震え上がった。

「ねえ、お兄さん達……」

「あん！？何だデメエ！」

スタンリーは氷のような笑顔のまま、その肩をガシツ、と掴み、言った。

「ちょっとオモテ出ようか？」

なぜ、表がオモテなのかはだれにもわからない。

「吠えてんじゃねえぞガ……」

バキツ。

チンピラがその言葉を言う前に拳が突き出され、そいつは、鼻から盛大に血を噴き出しながら倒れた。

「デメエなにしゃが——ぶべらちっ」

またも言葉を言い終わる前に、今度は上段蹴りがもう一方の男に命中した。

スタンリーは2人の首根っこを掴み、ドアを足で蹴り開けて、表に出て行った。

（ただいま、とても凄惨な光景が続いております。しばらくお待ちください）

「これで良しっ」と

15分ほど時間が過ぎた後、いつもの状態のスタンリーが戻って来た。

「お、お兄ちゃん、だいじょうぶなの？」

「ん？ああ、問題ないよ」

いつもの穏やかな笑顔で答えるスタンリー。

「スー君、ありがと！」

とフェルムは彼の頬にkiss

おおおっつ。

と『キャンディ』の常連客はどよめく。

「う……？」

ナニ、じゃなかった、何されたのか自覚していないのか、スタンリー。

「ちょっと、疲れた。俺寝る」

いやちよつと待て。

お前ここに来るまでも寝てたたる！

「じゃあ、向こうで食べる？」

と、フェルムが指をさしたのは、奥のVIPルーム（実際はスタンリー専用）。

「おう。そうする」

「分かった。料理はいつものでいい？」

「俺はね。ミリはなにが食べたい？」

ちなみにいつもの、とはオニオングラタンスープと、ソフトフランクパン。そして、ミートローフ。

スタンリーはオニオングラタンスープが季節を通して大好物なのだ。

「え？ミ、ミリも？」

今まで、スタンリーと話せなくて頬を膨らませていたミリは、いきなり声をかけられ、おどおどわたわたしている。

彼女の微笑ましさに常連客も、2人の少年少女も頬を緩めた。

「ミリは、うーんと、スパゲッティ？カルボナーラ？にする」

「了解だよー。少し待っててね」

フェルムが厨房に消えると同時にスタンリーとミリも奥の部屋へ消えた。

数分待つと、料理が運ばれて来た。

こんがりと焼けたチーズが食欲をそそるオニオングラタンスープ。ふんわりしっとり柔らかなソフトフランクパン。

どっしりとしたミートローフ。

「うん、おいしそう。いただきます」

黄金色に輝くカルボナーラ。

「いただきますーす！」

「召し上がれー！」

スタンリーはゆっくりと食べていく。

ミリをそれに合わせゆっくりと食べる。

フェルム自身も、肉団子スープとピラフを食べる。

「そういえば――」

ドアの向こうから3人の少年少女の明るい話し声が聞こえてくる。

その楽しそうな声を聞いて、皆初老に手が届きそうな常連客達は優しく目を細める。

「若いっていいねえ」

どっぷりと太った、しかし優しそうな婦人が言う。

「そうだねえ」

常連客達も、昔を思い返しているのだろうか、少し遠くを見つめていた。

「昔はあんなにちっちゃかったのになあ」

「ほんと、いつの間にか大きくなったわよね」

彼らはスタンリーに差別を向けず、『孤児』ではなく、『皆の子供』として、扱っていた。

その心が届いたのだろうか。

幼い頃のスタンリーのような、デイビット神父とフェルム以外全てを憎悪するような視線は無くなった。

しかし、今でも昔の面影は残っているようで、偏見を持った大人や同年代の少年達が向ける中傷に対してはその視線が復活する。

しかも、その視線は何倍もの鋭さを持って突き刺さってくる。

さながらそれは鋭すぎて触れたら怪我をする氷柱のような、そんな視線だ。

昔のような狂気は今でも彼の中にくすぶっているのではないだろうか。

昔より遥かに濃密さを増して。

それが彼らの心配材料だった。

少し前。この喫茶店に若い帝国軍人が訪れた。

スタンリーの食事の世話しているところだったフェルムを侮辱し、スタンリー本人を侮辱し、あるうことかデイビット神父までも侮辱した。

スタンリー本人への侮辱はともかく、家族の2人を侮辱されてスタンリーが黙っている訳がない。

修羅のような勢いで若い帝国軍人の手足を斬り落とした。

そのときの彼の瞳は明らかな狂気に染まっていた。

なぜ常連客達はそう思ったのか。

それは彼の瞳がいつものように黒色ではなかったためだ。

彼の瞳は違う色に変化していた。

彼の瞳は――<sup>レッドアイ</sup>紅い目だったのだ。

常連客達はデイビット神父に問いただしたが、彼は言葉を濁すだけで、何も教えてはくれなかった。

しかし、今の彼にそんな雰囲気は全く感じられない。守ると決めた少女達と楽しそうに談笑しているだけだ。

常連客達は彼の誓いを知っているが故に、なおさら優しい瞳でかれを見るのだ。

カランカラン、鈴が鳴った。

「やあ、皆か」

入って来たのはデイビット神父。

「やあ、こんばんは！」

「こんばんは、デイビット神父。壮健そうで何よりです」

その言葉に軽く手を挙げて応えるデイビット神父。

彼が教会地区でどれだけ慕われているか分かると言うものだ。

「スタンリー達は？」

デイビット神父はなぜか楽しそうな表情で聞いた。

「奥の部屋よ、デイビットさん」

どつぷりと太った婦人が言った。

「む……、それでは邪魔するわけにはいかな……」

デイビット神父が悪戯な笑みを浮かべていったその言葉に常連客達は大爆笑した。

彼らはデイビット神父の企みを知っている。

すなわち『フェルムの思いに報いてあげよう作戦』だ。――まあ、苦情は後で受け付けよう。

その爆笑で誰か新しい客が来たのか、と気づいたフェルムが慌ただしく出てくる。

まるで護衛のように部屋からスタンリーも滑り出して来たが。

「デイビット!？」

スタンリーは驚いていた。

『教会の用事があるから、帰りは遅くなる』

と言つて出て行ったはずのデイビット神父。

まさか夜ご飯のうちに帰ってくるとは予想もしていなかったのだ。

「速いなら速いつて連絡してくれればいいのに」

スタンリーは拗ねたような表情をする。

いつも大人っぽいぶん、彼がたまに見せるこうした仕草は、彼をまだ17歳の少年だと示していた。

それに気づいたデイビット神父はますます笑みを深くして喋る。

「ん? 何をするつもりだったんだ? フェルムでも連れ込む気だったのか?」

「なっ!？」

スタンリーは顔を真っ赤にする。

助け舟でも出してもらうかと、彼が横を向くとフェルムが「はう……」と言つて真っ赤になっていた。あ、湯気まで出ていた。

「そ、そ、そんなわけないだろっ!」

なんとかして絞り出した言葉はめちゃくちゃにどもっていた。

「じゃあ何だ? ミリを抱き枕にするつもりだったのか?」

そう、彼がミリのベッドで仮眠をとっていた時、その真横にミリが入ってきて一緒に寝ていたのだ。

小さいくせして、なかなか大胆なことをする少女である。

デビット神父は、彼はその時寝ぼけていた、という大事なところは言わなかった。(↑そこが一番大事だろっ！)

ちなみにミリはスタンリーより早く起きて、腕の拘束からなんとか脱出していた。

「……、あー！もう！」

スタンリーは頭を抱えた。

——この馬鹿親父イイイ！！

ついでに心の中で罵っておいた。

「ふふ、冗談だ」

デビット神父のその言葉を聞いて、からかわれたと気づいて凍結したスタンリーが解凍されたのは5分後である。

解凍方法はミリのチョップ、その名も『ミリチョーラーップ』だった。

「私には、モーゴレムのカツレツのAセットを頼む」

デビット神父は凍結させた自分の息子を尻目にゆうゆうと注文していた——自分の息子の名前で。

何とずる賢い聖職者なのだろうか。

「わかりました、だよ。少しお待ちください」

ちなみにモーゴレムとはビーストの一種で、かなりおとなしい性格。その肉と乳は美味なため、家畜で飼われたりしている。

一言で言うなら乳牛と肉牛を足して二で割った感じのビースト。

捕獲も簡単で、こちらが攻撃を仕掛けなければ攻撃をしてこないというほど、凶暴が代名詞なビーストではおとなしい種。

「いただきます」

デビット神父は優雅な動作でカツレツを食べ始めた。

その間にスタンリーと美少女2人は奥の部屋へと戻っている。

スタンリーはこれから寝るのだが、フェルムと一緒にいるとちょっ

としたイベントが起きる。

彼らの関係性と、フェルムの服装。

すなわち、膝枕だ。

フェルムはスタンリーを膝枕すると、状況にもよるが、必ずしもいいほど歌を歌う。

それは、この大陸では有名な子守唄だった――。

### 第三話 — 喫茶店 — (後書き)

いかがだったでしょうか？

次回は『子守唄』についての話です。  
それでは。

#### 第四話 ―勇者への子守唄（ララバイ）―（前書き）

今回は伏線の登場を何ヶ所か暗示しています。  
それを探してみてください。

#### 第四話 ―勇者への子守唄（ララバイ）―

場所は奥のVIPルーム。

ここでは、スタンリーがフェルムに膝枕されていた。

ちなみに、ミリは常連客に呼び出され話し相手をしている。

「悪い、しばらく寝かしてくれ」

スタンリーは、その言葉を最後に轟沈。

その寝顔を優しい笑顔で見つめ、髪を梳いた後、フェルムは透き通るような声で唄い始めた。

『私の勇者よ、空を見上げよ、星々は唄うよ、眠れ眠れ、静かに』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて』

『私の勇者よ、闇の中を照らせよ、そこには、幾千の時の声』

『その歌は、光の中に、眠れ眠れ、と響く』

『永久とこしえの中で、宿命を忘れて』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて』

『私の勇者よ、必ず私に、ただいま、と』

その美しい歌声は常連客達にも聞こえていた。

『勇者への子守唄ララバイ……』

誰か1人がそう呟いた。

「私も良く唄ったものだ……」

デビット神父が懐かしむように天井を見上げる。

「え？デビットさんがですか？」

太った婦人が驚いたように聞く。

「うむ。スタンリーが小さい頃にな、寝れない時にはいつも唄ってやっていたんだ」

『彷徨い果てて、私の横に倒れ込む』

『そんな君が、愛しくて』

『崖っぷちでもいい、君を愛してる』』

『君のために、祈り捧ぐよ、君を愛してる』』

『星々の導きで、出会えたのだから』』

『君の帰る場所はここだから』』

『ずっと、ずっと、待っているよ』』

「あれ？2番になると『私の勇者』から、『君』に変わってる？」

常連客の1人が不思議そうな顔で呟いた。

それに答えるように、デイビット神父が語った。

「この子守唄の起源はとても古い。大陸神話に出てくる勇者の物語の頃からだ。大陸神話が成立したのが約1000年前と言われている」

「へえ」

「大陸神話では、寝ている勇者をシスターが膝枕して唄ったのが最初と言われている。その後、2人は愛し合うようになった、と伝えられている。2番の歌詞は魔王を討伐していく勇者が、疲れきつてしかし、シスターの祈りでまた立ち上がり、それを見送るシスターを表しているのだ」

「なるほど」

常連客は皆、感心したように頷く。

1人が奥の部屋を覗いた。

そこでは、フェルムが唄いながら、スタンリーの頭を撫でていた。彼女は微笑み、そっとドアを閉めた。

「気持ち良さそうに寝てますよ、スタンリー君。まるで子供みたいです」

「まだあの子は子供だろうに」

デイビット神父は訝しげに言う。

「違いますよ。まるで、小さい子供みたいな寝顔なんです」

「あの子にとっては、フェルムの膝が一番の枕だから……」

呆れたような、優しいような、判別のできない微妙な表情を浮かべるデイビット神父。

「そうですねえ。もう、いいかげん、付き合っちゃえばいいのに」

太った婦人がそう言うのと、その場にいた全員が「うんうん」と言わんばかりに頷いた。

ちなみにミリはというと、一瞬にして2人を覆った、オレンジ色の空気に取り残され、ふてくされていた。

2人の出ず空気は、バカップルのようなピンク色の空気ではなく、名をつけるならば、サワヤカップルと言わなければならないか。

この地区に子供は少ない。まあ、若い夫婦もいるし、教会内に孤児院もあるのだが、大体が初老をすぎた男女や、退役軍人だ。

もともと、退役軍人はスタンリーを嫌って出て行ってしまったが。

その空き家には、『キャンディ』の常連客達の知り合いが次々と引っ越してくる。

その知り合い達は、別にスタンリーを嫌うような人間達ではない。

むしろ、スタンリーとフェルムを微笑ましく見守るような、そんなあたたかな人達だ。

この地区は帝国の首都の地区というよりは、教会を中心にした1つの国と言わなければならない。

また、スタンリーバウンティハンター本人も、フェルムや教会の子供達を守るために、この地区唯一の賞金稼ぎとして、活躍していた。

凶暴なビーストには、一体につき。。ゴールドと、賞金かけられる。

この世界の通貨はゴールドと呼ばれている。記号はGだ。

そして、種類のビーストを一定数討伐すると、『ハンターポイント』というものが与えられ、『ランキング』が上昇する。

この『ランキング』は、今までに稼いだ『ハンターポイント』の総数で決められる。

スタンリーの場合は、稼いだ賞金額はまあそこそ高いが、『ハンターポイント』は今2500ポイントぐらいしかたまっていない。なぜかと言うと、スタンリーに入ってくる討伐依頼は、同じビーストを駆逐することが多いからだ。

しかも、ビーストとしての強さは最低ランクの依頼ばかりである。例えば、逃げ出してしまったモーグリムの排除、同じく家畜のポークリム——大きな豚のようなビーストの暴走を止める、野生化したコケツクー、つまり鶏を巨大化させてダチヨウと2で割ったようなビーストの討伐。

ちなみに、モーグリムは牛、ポークリムは豚、コケツクーは鶏と表記する。

たまに出現する凶暴なビースト——リーフライ、ビーストタートル、ボーンビーストなどとランクの最低クラス——を始末するぐらい。それでは『ランキング』が上昇しないのもしかたないだろう。

——フェルム達とこの地区を守るだけがいい。  
このときの彼はそう思っていた。

しかし、運命は彼を放っておかなかった。

その呼び声はすぐ側に迫っていた。

1週間後、スタンリー達軍術学校の4年生達は、一度軍属を離れ、実戦経験と言う名の旅へと放り込まれる。

この旅で命を落とす者もいる。

ちなみに、その旅路で仲間になった者は、帝国に居住権が与えられると言らしい。

しかし、彼はまだ知らなかった。

この旅から、彼自身の秘密が明かされていくことを。  
彼はまだ知らなかった。

自分がどんな運命を背負っているのかも。  
彼の始まりが告げられる旅まで後一週間。  
運命を告げる鐘の音は彼に着実に近づいて来ていた――。

#### 第四話 ―勇者への子守唄（ララバイ）―（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はたびたび物語中にでてきている、『帝国軍術学校』でのコマです。

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3338z/>

---

ロード オブ ギャラクシア

2011年12月16日18時55分発行